

昭和62年度宇宙開発委員会外国人招へいについて(案)

昭和63年1月13日

宇宙開発委員会

決 定

昭和62年度における宇宙開発委員会外国人招へいとして、ドイツ連邦共和国研究技術省(Bundesministerium für Forschung und Technologie)第5局長(航空・宇宙、材料、交通担当)である Jan-Baldem Mennicken 氏を昭和63年3月6日より3月12日の間招へいすることとする。

Dr. Jan-Baldem Mennicken の招へい目的

Mennicken氏が属する研究技術省は、ドイツ連邦共和国(以下西独という)の科学技術を総合的に推進する官庁で、我が国における科学技術庁にあたるものといえる。

西独の宇宙開発は、研究技術省とその付属機関である航空宇宙研究所(D F V L R)を中心に推進されており、科学衛星、通信衛星、宇宙実験等独自の計画を進める一方、独仏共同によるレントゲン天文衛星 R O S A T、木星探査機ガリレオ計画等の国際協力にも力を注いでいる。Mennicken氏が局長を務める研究技術省第5局は、航空・宇宙を所管しており、西独の宇宙開発行政の中心的役割を果たしている。

我が国は、今後発展が期待される微小重力の分野で西独と協力を進めようとしており、同国との協力は益々緊密になると考えられるところ、この度、同氏を招へいし、宇宙環境利用、ゼンガー計画等宇宙開発に関し意見交換を行うことは、我が国の宇宙開発の推進にとって有意義であるとともに重要性がさらに増しつつある国際協力の発展に資するものである。

このため、昭和62年度宇宙開発委員会外国人招へい者として西独研究技術省第5局長 Jan-Baldem Mennicken 氏を招へいするものである。

Mennicken氏招へい日程(案)

- 3月 5日(土) 西独発
- 3月 6日(日) 日本着(東京泊)
- 3月 7日(月) 午前 在京西独大使館表敬等
午後 大臣表敬、宇宙開発委員会表敬及び意見交換
夜 歓迎晩さん会
(東京泊)
- 3月 8日(火) 午前 宇宙開発事業団訪問
昼 昼食会
午後 経団連記念講演会
(東京泊)
- 3月 9日(水) … 種子島へ移動
種子島宇宙センター視察
(鹿児島泊)
- 3月 10日(木) … 名古屋へ移動
午後 三菱名古屋工場視察
… 名古屋泊
- 3月 11日(金) … 横浜へ移動
午後 日本電気横浜工場視察
(東京泊)
- 3月 12日(土) 日本発

Dr. Mennicken 西独研究技術省第5局長履歴

1. 生年月日、出身、家族

1935年2月1日生まれ(52歳)、ケルン出身、妻及び子供2人

2. 学歴

1955～58年 ボン大学及びケルン大学において法律学及び国家学を修める。

1966年 法学博士号取得

3. 職歴

1963～65年 ケルン行政裁判所判事補

1965～69年 保健省援助課

1969～ 研究技術省

1971～74年 EC代表部出向(ブラッセル勤務)

1974年9月 グループリーダー

1977年8月 EC委員会EURATOM援助局長

～83年1月

1983年2月～ 研究技術省管理・技術政策部長

1986年6月～ 研究技術省第5局長(航空・宇宙、原材料、地球科学、交通担当)

西ドイツの宇宙開発

1. 概要

西ドイツの宇宙開発は、研究技術省(BMFT:1972年12月教育科学省より分離)とその付属機関である航空宇宙研究所(DFVLR)を中心に推進されており、科学衛星、通信衛星、宇宙実験等独自の計画を進める一方、独仏共同による直接放送衛星TV-SAT/TDF-1、米国との共同によるレントゲン天文衛星ROSAT、木星探査機ガリレオ計画等の国際協力にも力を注いでいる。

また、欧州宇宙機関(ESA)としての活動では、かつてのスペースラブの開発において中心的役割を果たすとともに、現在の宇宙ステーション計画やコロンバス計画等において宇宙環境利用分野の主導的役割を担っている。

2. 宇宙開発計画

①科学分野

米国のロケットを利用して、バンアレン帯等を観測するAZUR(1969年11月打上げ)、上層大気観測衛星AEROS-1、2(1974年7月)、太陽観測衛星HELIOS-1、2(1974年12月、1976年1月)を打ち上げた。

②通信分野

国内通信を目的とするDSF及び直接放送を目的とするTV-SAT1を今年打ち上げる予定である。

③宇宙実験分野

- ・ T E X U S 計画

小型ロケットによる宇宙空間での材料地上実験で、1977年以来スウェーデンのESRANG基地から英国のスカイラークロケットを用いて実施している。

- ・ スペースラブ利用

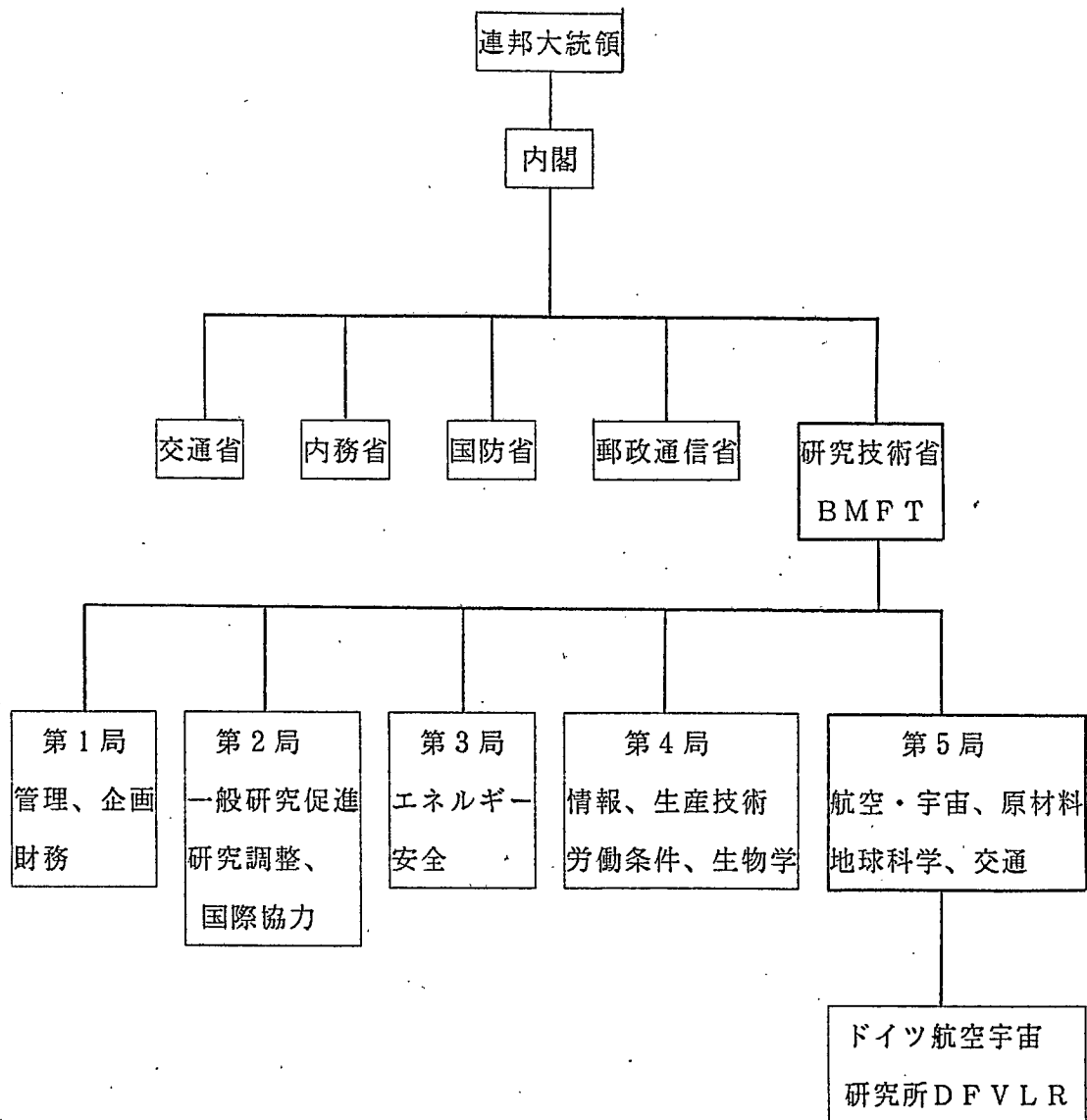
材料実験等の宇宙実験を目的として、1985年10月には、スペースシャトルを利用したスペースラブD-1を成功させたが、現在、これに続く2回目のシャトル利用による宇宙実験D-2計画を進めている。

また、シャトルに小型実験容器を搭載して宇宙実験を行うMAUS計画も有している。

- ・ S P A S (Shuttle Pallet Satellite)

各種の宇宙実験装置を搭載したパレット衛星でシャトルで打上げ／回収を行う。1号機は、1983年6月に打ち上げられた。

3. 宇宙開発体制



4. 宇宙開発予算

(単位:百万マルク)

	1985	1986	1987
研究・技術開発	1.1	2.8	9.0
施設運用	27.7	33.7	34.6
E S A への出資	414.1	561.0	705.0
スペースシャトル/ラブ利用	119.8	99.2	125.5
宇宙応用(通信、R S 等)	42.2	75.5	49.0
宇宙科学	123.6	98.4	83.8
D F V L R 宇宙予算	94.6	91.6	103.8
計	823.2	962.2	1110.7
日本円換算値(億円)	667	780	900

注) 1 マルク = 約81.03円(1985年)として換算

注) 出典: D F V L R ニュースリリース

(参考)

日独微小重力科学に関する協力

1. 経緯

昨年3月11日及び12日に東京で開催された日独科学技術協力委員会において、微小重力科学に関する協力を行うことが、我が国と西独との間で合意された。

2. 内容

本協力は、宇宙環境の特性の1つである微小重力下における物質の特性あるいは微小重力の生物への影響に関する研究を行おうとするもので、日本側は振興調整費を用いて行うことになっている。

3. 現状

現在、日独の間では、10の研究テーマについて協力が行われることになっており、このほか、6つのテーマについて調整が行われている。

4. その他

微小重力科学については、フランスのCNES(国立宇宙研究センター)とも協力を行うことになっている。